

I. 問題と目的

近年、QOL (quality of life) の考え方が広まり、障害児・者の地域社会での暮らしや個人の生活をより快適なものにすることが重要な課題となってきた (関戸, 1998)。発達障害のある個人の余暇支援においては、好みや楽しみに基づき本人の主体性や自発性が発揮できるようにすることが重要であり、幼児期から学童期にかけての時期に豊かな余暇活動を経験しておくことは、成人期の主体的な生き方、余暇を豊かに過ごす力の基盤をつくることとなる (岡部・渡部, 2006; 黒田, 2005)。

しかし、発達障害のある子どもについては遊びや余暇活動の未発達、少なさが指摘されている他、活動を自発的に開始させることが困難であったり、周囲の刺激を敏感に受けすぎてひとつのことに気持ちを集中しにくかったりといった問題点があげられている (井上, 1998; 渡部ら, 1995)。

従って、子どもがその発達段階で興味・関心をもつことが出来る様な環境や、行動や活動のきっかけとなる手がかりがわかりやすい環境、子どもが自発的に繰り返して取り組むことが出来る様な環境や、強化が得られやすい環境を設定することが重要である。

そこで本研究では、子どもの発達状況に応じた指導の中でも、余暇活動に向けた環境条件の設定に焦点を当てた指導の工夫の効果を検討することを目的とする。なお、本研究における環境条件の設定とは、物理的な環境の整備を含め、行動や活動を成立させるための手がかりの提示や、指導者や母親といった人的環境を含めた環境側からの子どもに対するアプローチをさす。

II. 方法

1. 対象児

小学校特別支援学級に在籍する自閉症と知的障害、ミオクロニーてんかんを併せ持つ2年生 (8歳) の男児 (以下、A児とする)。新版 K 式発達検査の結果は、認知・適応 2:4 言語・社会 2:0 全領域 2:2 である。音楽が好きで、簡単な楽器演奏を楽しむなどよく反応する。

2. アセスメント

間接アセスメントと直接アセスメントを行った。

3. 標的行動

- (1) 活動従事行動：ひとりで、または他者と関わりながら、一定時間活動に従事する行動
- (2) 活動自発行動：自分から楽器または用具に触れ、操作する行動

4. 場面設定と研究期間

B 大学発達心理臨床研究センターにて、2008 年 10 月から 2009 年 9 月までの期間に実施され、月 2 回 (1 回あたり 60 分) 行われたセッションには A 児の母親も同室した。

5. 手続き

ベースライン期を実施した後、介入期に環境条件の設定による指導を行い、介入期終了より 1 ヶ月後にベースライン期と同じ設定でフォローアップ期を実施した。

6. 評価方法

- (1) 活動場面をビデオ記録し、各活動への従事時間と、自分から楽器または用具に触れ、操作する行動の生起頻度を測定する。
- (2) 指導において効果があった場面の環境条件の設定と対象児の反応を詳細に記述する。

III. 結果と考察

1. 環境条件の設定

有効であったと考えられた環境条件の設定内容を以下に示す。

- ・部屋の四方それぞれの壁に向かって4つの活動を1つずつ配置する
- ・4つの活動を示す写真が貼られた活動選択ボードを入口脇に設置する
- ・対象児が好きなキャラクターのシールをピアノの鍵盤やドラムパッド、玉に貼る
- ・対象児が好きなキャラクターの名前をリズムに合わせて唱える
- ・対象児が好きな音やメロディーを提示する
- ・ことばによる弁別刺激や視覚的な弁別刺激(シール等)を設定する
- ・5種のプロンプトより効果的なものを提示する
- ・連続強化スケジュールによって強化子を提示する

2. 標的行動

(1) 活動従事行動について

各活動の従事時間を Fig. 1 に示した。

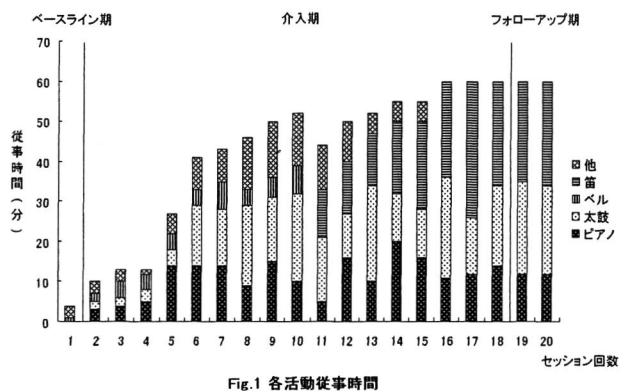


Fig.1 各活動従事時間

全体として活動従事時間は経時的に増加し、特に笛はその傾向が顕著であった。笛は同時に複数の音を鳴らすことが出来る笛で、音を鳴らしたことが体感的にもわかりやすく、同時に複数の音を鳴らすことが出来ること等から興味・関心が持続したものと考える。一方、ハンドベルと玉通し(他の活動)は従事時間が減少した。玉通しは学校でも実施するようになったこと、ベルは音を鳴らしたことによる体感刺激が得られにくく、同時に2つの音しか鳴らすことが出来ないこと等から興

味・関心が持続しにくかったものと推測される。

(2) 活動自発行動について

電子ピアノの活動における従事時間と自発頻度を Fig. 2 に示した。

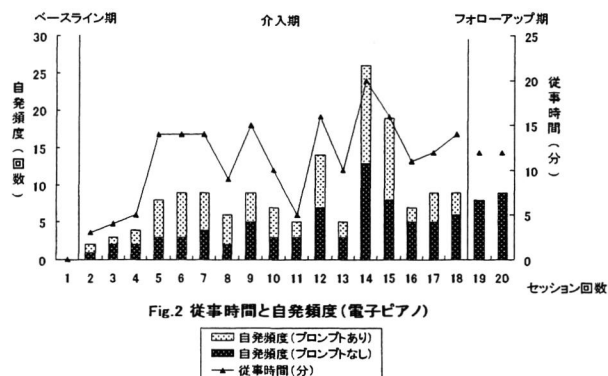


Fig.2 従事時間と自発頻度(電子ピアノ)

ベースライン期ではプロンプトなしでの自発的な行動が生起せず、活動に従事しなかったが、介入期の指導において自発的な行動が生起すると共に従事時間が増加し、フォローアップ期ではプロンプトなしでの自発的な行動と従事時間が維持された。A児の自発的な行動は、指導者によるモデルと、好きなキャラクターを視覚的かつ言語的に提示したことにより増加し、興味・関心の持続によって維持されたものと考えられる。

IV. 総合考察

本研究では余暇活動に向けた環境条件の設定として、セッションルームにおける楽器・用具等の配置の工夫と活動選択ボードの設置、対象児の好みに基づいた活動の提示、行動や活動のきっかけとなる弁別刺激の設定やプロンプトの提示、強化子の提示と強化スケジュールの変更を行った。その結果、対象児が自発的に活動に従事し、積極的に活動を楽しむことが出来るようになった。子どもが自発的に活動に従事し、積極的に活動を楽しむためには、子どもの発達状況に応じた具体的な環境条件の設定が必要であると考えられる。

主任指導教員 鳥越 隆士
指導教員 高野 美由紀